

## 己れ一人は正覚はとらぬ

### 1

山岸巳代蔵が予言能力について、いたく関心を抱いていたことを語ってくれた人がいた。何でも街を同道していて占師がいたりすると、手相だろうと墨色判断だろうと飛び込む。「そんなもんおいとけや」と止めると、「いや、何でも検べてみねば……」といい、「的中率は六割ぐらいやなあ」とつぶやいていた。

岡本天明という霊媒者は、山岸のことを霊的能力の持ち主やと語っていたそうである。山岸は確かにその方面には関心も能力もあって、いくつも挿話があるのである。ことに人の訪れを予告することがうまくて、特講に来る人や山を出てゆく人が相談しにくるのを予め知っていたりした。ある人がバスの中で、「後ろから母さんの声を聞いたことがある」というと、「そういうことありますよ。実際に子供に聞こえるもんですよ」と答えていた。

火傷の後に四国旅行をしているのであるが、その際高知の会員の宅を訪れて、裏手の方へ廻って辺りを眺め廻していたと思ったら、真つ黄色に熟れたキンカンの実が二つ三つなっているのをみつけて、「ああ、これがあると思うていたんや、この家にこれがあることはどうから知ってたんや、これ

や、これや」と、狂喜したという。その際、家のものが、「先生、衝立の向うもみえるようになるというのですが……」と聞くと、「ああ、みえる、みえる。みんなみえるようになる」と応じていた。

霊的能力といえは古めかしいが、当今流行のように、指で色彩を当てたり、地図で死体の場所を発見したり、などの超能力者は実在するのである。常識的感覚では図ることもならない、超現実の世界は実在する。ヨガ書によると、そういう能力はチャクラを開発して、固い自我が無限の大宇宙に溶解されてゆく中で養いうるものようであるが、無我執一体を説く山岸にあって、四次元的真実の世界のあったことはうなずけるような気がするのである。

聞くところによると、福里二ワも動植物との交感に優れた人のようである。天性の能力を秘めて小学校も、女学校も途中で退き、読書の人ではないから動物物的感性が人並はずれて発達しているということだろうか。

例の山岸との最初の口づけの折にも、七色の色彩を見ることができたとか——。二人が抱きあっている間中、周囲には七色の色がとりまいて、しかもその形はクサビ状になって二人の間に打ち込まれている感じであった。想い出すと今では大分見えなくなったが、それでも黄、青、赤の三色くらいはみえるという。山岸はその話を聞いて、何の神示であるか天明さんに聞いてみたいと洩らしていた。

仏教の方では「正定聚の機」というが、幾万人の人があろうとも教えを聞いて心の眼が開かれ、必ず悟りの機根を得られる人というのは、ほんの少数の限られた存在に過ぎない。所詮「機根」のない人は縁なき衆生ということになるのであるが、山岸は二ワにその「正定聚の機」ありとみたのである。幾万遍無我執といったって、聞けない人にはいつまでたっても聞けないし、我執に気づき、はずすには、それはそれなりに能力（才能と実践）を必要とする。しかしそれも男のような理解力と、実

行力を持つニワには才能を認めたのである。

かつての特講の際の、ニワの突然の人間転換がそれを示していた。

ニワは「誰のものでもない」ということばに瞬時に反応して、「ああ、これが私の求めてきた御者だぞ、私という奔馬の御者をみつけたぞ」と思った。考えてみれば「誰のものでもない」など、誰にでも気がつきそうなものが、何で今までわからなかったのか不思議に思った。人は所有の中にあればこそ、みなギコチない生き方をしているのじゃないのか？ 誰のものでもなければこそ、万物が生かされるのじゃないのか？ この生き方こそ永遠につづく。この道こそ私の御者だぞと、ショックでがくがくになっていた。

休み時間になると、みなは附近の滝を見にいったが、滝を見にゆくためには、入口が狭くなった道を下ってゆかねばならない。ニワはその道の先へ行って、後から出てくる人を待ち構えていて、下りてくる人一人づつに、「あなたの私、私のあなた」と握手した。それまでニワは握手するどころか、異性を傍に近づけたこともないような人物であったのに。今は人間自体が無性に親しくて、ほほずりせんばかりに受講生達と接したのである。

その自己全体が揚棄されて解放された感覚は、宇宙全体に自己が拡散されてしまったごときもので、そこには自己自身を壁する何ものもないといった感じであった。

しかしこの歓喜は現実には山岸という男の前では、一旦背景に遠ざかり、代るに無我執をつきつけられたのであるが、それがニワには仲々わからなかった。ニワは今まで通りの習慣を守っているだけというのに、あれも我、これも我、マスカット食べても我、ポーラつけても我、足袋にアイロンかけても我——では、わけがわからなかった。しまいには泣くのも我、笑うのも我なら、人は生きておれ

んではないかと思った。しかもその自死すらも我とあらば、死ぬこともならない。

我とは人間のどこを指しているのか。己れが生きていること自体が我でない以上、人間のどこかを指しているんだろうと思うが、それがわからない。

それが山岸会事件の数日前のことであるが、またして二人で私の研鑽となり、ニワはその時は自分から室を飛び出して裏山の方へ入っていった。それまでは二人がいい争うと、決して山岸が「たまたらない、たまたらない」といいだし、ニワが「それ、そのたまたないを今すぐここではずして下さい」「離してみして下さい」と迫ると、「あなたは理責めでかかってくる」と室を飛出していったものである。

それが今は反対となつて、自分の方が飛出して行って、山にしゃがみ込んで下の村を眺めて開放感を味わっていた。そこへ山岸がきて、おだやかに優しい声でいった。

「あんたばくにそういう時離せというね、それを今、あんたがそれをやったら……」そのことばに、ニワは瞬時に目覚めるところがあった。「ああ、このつっぱり頑固さが我といわれるんですか？」という「そう、それですよ」という。「ああ、それをいわれるならば、それなら我はありますよ。成程それを我といわれるんですか」といさぎよく我を認めた。

この時初めてニワは、山岸のことばが聞けたのである。私の実質的な内容に、やっと手を触れることができたのである。我とは個々の具体生活自体ではあるが、むしろ具体生活を支えている内側のもので、絶対に許せんとか、後へは退けんとかと、頑に守っているものの謂であることに気づいた。なまじ自分の頭が柔らかいことで、一層我というものをわかりにくくしていたのである。

ニワが気づいたつっぱりが即我であるというのは、簡単にいえばつっぱりつぱっている気持ちにあって

は、いうことは自己主張ばかり、人の話は聞く耳を持たないという意味であった。ただしニワとすれば、山岸の複数婚の理は認めても、言動に承服できないところをつっぱっていたのであるが、つっぱりはつっぱりであるには相違ない。その点を山岸は指摘した。

この我執の何たるやにおぼろげながら気づいた時点からニワは、潜在心理的には、山岸へ接近するスタートを切っていたといえる。現実にはいつでも逃げだせるように、周りの荷物を方々に拡散していたのであるが……。

冒頭にニワが蛇を好きになろうとしたことを述べたのも、我執を破るためのものであって、山岸が世の中で一番苦手なものは何だというから、探すとそれは蛇だった。ニワは蛇をみると忽ち硬直してしまつて、追っ払うことも、逃げることもできなくなる。路上に捨てられた古縄をみただけでも、ギョッとするくらいなのである。「その蛇をとにかくあんたは好きになればいいね」といった。「とても好きになれませんか」というと、「そんなら蛇を掴んできてあんたの懐に入れてあげようか。それがいやなら寄ってゆけ、いやならなお寄ってゆけ」といった。

そういうことから、田圃の高台に家があって、そこら辺に蛇がよくいたので、そこへ行つて蛇をみようとした。「蛇もあんたに嫌われるために生れてきたのでもあるまい。蛇でも好きになれば、それだけあんたが広くなる」の一言にこたえたのである。「そうだな」とその時は心から思えた。

何千万、何十億の人がいても、行わない限り現実の世界には近づけない。それがたった一人でも行える人ができたなら、現実の世界は実現できる。「あんたはその一人になれ」と山岸はニワにいうのである。「それじゃああなたなつて下さい。提唱者からどうぞなつて下さい」というと、「ぼくは発明家であつて、自転車が発明した。だが自転車を発明した人が、一番うまい乗り手とは限らない。乗り手

は別の人が一番手に出てくる。だからあんたがその一番手になれ」というのである。

山岸はまた同じことを、マッチにも例えた。「ぼくは科学者が火薬を発明した。火薬を発明したが、ぼくはその使い方を知らない。どうして使つていいのかわからない。それがマッチというものにして、使い方を考えるのがあんただ。実際化してゆくのあんただ」というのである。

そういう話の中でニワは「これじゃあいけない」と思った。相手が道理で説いているものを、自分はなぜ受け入れられないかと反省した。そこへ以つてきて、「そんなら志づ子さんど交替します」だの「バス停でいい男をみつめてついでにいいだのとわざとウソをいって挑発すると、山岸はそのことばを真に受けて、顔は障子紙のように白くなつて今にも倒れそうになつた。それをみてニワは「こんなにも辛がつているものを、冗談いってはいけない。本当に死ぬかもしれん」と同情心を寄せた。

そんな経過があつての年末頃、ニワは側近者の一人を呼び、山岸の前で、「証人になつてね。もう二度と先生には逆わないから。両手両足上げて全面降伏したから、これからはもう逆わないの。だから証人になつてね」と誓つた。

これがいわば仏教でいう「発菩提心」ということであらうか。いかな悟りも、悟りを得ようとする心懸けなくして生れるものではない。その意味では悟りの前の「やろう」とする心懸けがまず問題なのである。これを「発菩提心」あるいは「発心」といって、非常に重要視する。ニワはようやくこの「発心」に辿りついたのであるが、「発心」自体、やはりそれはその人の身に備わる「機根」の問題であらうと思われる。

山岸はそのニワの「発心」を認めると、「ごほうびをあげる」というので、何を呉れるのかと思つていたら、翌年（三六年）の二月頃、山岸はニワを伴つて名古屋の中川区烏森に住んでいる、六畳と

三畳の二間しかない娘夫婦のアパートに転がりこんだものである。「どうだ最愛の娘に会えて嬉しいだろう。これがごほうびだ」というのである。ニワは嬉しいよりも驚いた。「これからどうするんですか」と尋ねると、山岸は平然として、「ここに住まうんや」というのである。

「こんな狭い娘夫婦のアパートにどうして……」と、すぐにニワは近所にバルコニーのついた二階の室をみつめてきて、そこに移り住んだのである。

むろん発心したといえども、急転直下人間が変わるものでもない。最初の解決を迎えるまでにはほんの二、三カ月といえども、心はいやなことがあるとやはり山岸を離れようとした。そのたびにニワは意識的に手段を考えては、むりやり自分を修行に追い込む。ある時は自分の膝を手で叩いたり、鏡の前で、「私は幸せです」といったりするのである。

膝を叩いて、叩いて、両膝とも真黒になり、鏡の前での演技はぎこちなくても、努力を重ねていると、少しづつ悟りが開けてくるような気がした。その開けた悟りの上にまた悟りを積み重ねてゆく訓練である。先生から心が離れたなど思うと、ふわっと洪水のようにいやな感じが湧いてくる。そんな時にパッと先生の和服の胸を開いて、直接肌に顔を押し当てていると、だんだん先生の体温で気持が通ってくるのがわかった。

山岸はそんなニワを抱きしめて、「偉いよ、よくやるよ」「偉いよ、そこだね、そこだね」と優しく、励ましていた。その挙句がごほうびの名古屋行きとなったのであるが、ある日、ニワはまたしても山岸から離れるものを感じて、いきなり山岸に抱きついていった。抱きつくと同時に相手の襟首を持ってひき倒し、体の上に馬乗りになって首をしめつけた。

その時のニワの頭の中では台所から包丁を持って行って、相手を突き刺しているのである。「恐ろ

しい！」とあって、ハツとして手をゆるめた瞬間、上にあるものも下にあるものも殆ど同時に笑いがかみあげてきて、「あっはっはは……」と笑いだしたものである。なぜそういうことになったのか、理由はわかるわけもない、ただその瞬間の機勢が、二人に心からの哄笑を呼び起こして転げ廻ったにどどまる。それから間もなくのことであった。

二人の間で、あの時のあの行動はこういう意味なのでしょう、か、「そうです」、それではあの場のあのことはこういう意味なのでしょう、か、「そうなんです」というやりとりがあった後、ニワは、山岸から三尺下がって、畳に手をつけて頭を深々と垂れていった。

「本当に時間をかけてすみませんでした。ようこそ今までコリないで導いて下さいました。本当にありがとうございます」

すると山岸はパッとそれ以上に飛びすきって行って、同じく両掌を畳について、「いや、お礼をいわなければならぬのは私の方だ。お詫びをいわねばならないのは、私の方だ。本当にまずい導き方をして、ようこそ生き延びて下さいました。ようこそ氣も狂わないで生きていてくれました。本当にこれこの通りです」

といい、頭を畳にこすりつけてひれ伏した。

ニワがまた自分が素直でないばかりに、随分遠回りして時間をかけさせたことを詫びると、山岸は直ちに否定して、むしろそうであればこそよかった。いわばあんたはジャングルを歩いてきたようなもので、そののたうち廻って歩いた後には、足跡がついている。それをボンと飛び越してきていれば、二人だけの世界になってしまう。あの夫婦は特殊の夫婦だからということ、普通の人はついてこれない。この苦勞の足跡があることで、普通の人も容易についてこれるといった。

この二人の最頂点に達した確認の場があったのは、山岸の死の一月半前である。

## 2

それでは漸くのことにニワが抜けできることができた、山岸の意図した世界とはどんなものであったかといえ、それはこれまでの経過でもわかるごとく、別に二人だけの愛を確めあつたわけでもないのである。山岸はそんな「個人的関係だけの愛情問題ならば、どうに諦めていた」という。

ニワが知つた愛とは即ち絶対愛の世界であつて、性格的には無辺境の愛となる。愛は無辺境なるが故に、二人や三人のみならず民族全体に及び、民族をも超えて全人類に至り、さらに人類をもつき抜けて動植物、いや無生物にまでへの愛情となる。つまりは絶対愛とは宇宙愛と重なるのである。そして絶対愛即無辺境の愛即宇宙愛とは、いい変えてみれば、無固定、無所有、無我執の愛であり、「絶対愛」の一点において、これまでのすべての法の集約的表現となるのである。

この絶対愛については、先に性愛の問題に触れた折に若干解説してあるが、山岸は愛は宇宙の根本であることを説いて、次のようにも説明している。

「愛とは真なるもの。真即ち愛である。大愛、無辺の愛、絶対愛、真の愛とよぶことができるであろう。人間を含む宇宙万物保ち合ひの仕組の作用のことをそういえると思う。磁気、電力、引力、未だ解明に至らない段階のものを含む気体、液体、固体等の有形・無形物、無意識であろう無生物も、皆愛の作用によつて存在する。また何れもそれぞれの本能をもっていると思う。能そのものも愛の作用によつて発露する。無辺の愛、即ち絶対愛の理に即応することが真理で、真理に合うことが正しい。」

### 『正解ヤマギシズム文庫』第三輯

つまり宇宙そのものが引力か磁力か、何かの作用による保ち合ひであつて、その保ち合ひそのものを愛と名付ける以上、万物万人何一つ愛から逃れようがないのである。従つてそのような愛を絶対愛であるとす。山岸は無生物の石、水に至るまで何らかの本能を持ち、能は愛の作用によるものとみる。いわば極端な汎自然主義の人が山岸である。イギリスのD・H・ロレンスとともに「私の個人主義とは所詮一場の迷夢に終る」ものであり、「吾々は生きて肉のうちであり、また生々たる実体をもつたコスモスの一部であるという歓喜に陶醉すべきではなからうか」（「アポカリプス論」）と呼びかけたのである。

絶対愛の世界を聞いてニワは「それならば絶対愛とは太陽のごときものでしょうか？」と尋ねた。ニワのいいたい気持は、太陽は普く世界に光明を与える。太陽を嫌がるという動植物にまで光明を与える。例えていえばもぐらであるが、もぐらは太陽を嫌つて土中にあるといえども、太陽によつて養われたみみず、昆虫の幼虫のごとき小動物を食べて生命をつないでいるのである。

絶対愛は太陽の如しの言を聞いて、山岸は即座に肯定した。「私が十九歳の折にみつけたものも太陽であつた」と答えた。これで山岸が「嫌いなればなお近寄つていって、好きになれ」といった言も解けた。蛇はおろか、万物一切、嫌いなものがあつてはいけないのが絶対愛の世界、いや嫌いなものがあるはずがないのが絶対愛の世界である。幸福の定義と同じく、好き嫌いの相對語としての好きではなく、好き一辺倒の好き好きの世界が絶対愛の境地であることも、よく呑みこめた。

しかも個人愛を遙か超越した絶対愛においてであればこそ、それは知的世界としての意識とも重なる。一口に愛情といつても、愛と情は異なるのであり、愛が現実の縁に触れて発露されたものが情で

あつて、情においては知性は曇らされ、隠されるといへども、愛においては知性はよいよ知性的となつて、かえつて冴えてくるのである。

つまり、絶対愛とは普遍愛であり、偏りを許さぬ愛だとすれば、そこにはどうしても厳しい公正さを必要とする。その絶対公正さにおいて、やはり意識であらねばならない。例えば「わが子だから……」という盲目的情ではどうにもならないので、時にはわが子を捨て、他人の子をとる非情な行動をとることが絶対愛の世界となる。(自分の子と他人の子と二人川に落ちて死にかけている時、先に救うのは絶対愛の世界においては、必ずしもわが子とは限らない)。その場合の取捨選択の判断は、やはり意識の世界となる。

そういう絶対愛の表面的な無限の和やかさ、優しさと同時に、内面に秘めた覚めた、厳しい在り方も次第にわかつてきた。一旦山岸に対する己れというものが折れた二ワには、すべてのことが洪皮をむくように、次から次と解決されてきたのである。

それでは無辺愛の絶対愛においては、二人の夫婦愛はどうなるかということ、これにも山岸は独特の解釈をしていて、次のようにいう。

「正しいまぢがない自然界のいとなみによつて、よりどころのない月星、地球が宇宙界にまぢがないく動いている状態と同じものが、人間同志の結婚においてもあると思う。真の異性間の愛情を基盤として、尤も相合うものが心身とも結ばれるのが正しい結婚だと思ふ。無軌道と思える中に本當の安定がある。安定した結婚には約束はいらぬ。本當は結婚するという言葉もいらぬ。何ものにも束縛されない自由なもの。夫婦の愛情は固定したものでない。上べだけの愛情(意識したもの)はまだ本當でない。無意識のものは自分にも人にも分らないもの。現象に現われたものはその一端であ

る。心・情・感などの世界では、我執の出没によつて波立ち、言動、現象は結婚したり解消したりしているように見誤られるが、感の世界の基なる無感の世界では、絶対動かない離れようのないのが真の結婚だと思ふ。離れられない気持と縛る気持とは別である。従つて、いつもそのいずれか(両方にある)我執が消えた場合、心も現象面も完全無欠の完全夫婦と必ずなるであらう」(同前)

即ち山岸の結婚観は一言でいえば、結婚予定説である。この世の二人が結びつくのは、すでに月星の関係が一定であるごとく、最初から予定されていることであつて、引き合うものは本人にすら意識されることなく、すでに無感無色界(超感性の世界)において引き合つている。そういう二人は必ず一緒になつて幸福になれるし、その間に一時的破乱があつても心配はいらない。二人は必ず最後には結ばれるというのである。また複数婚については、

「ヤマギシズムの無固定、無定数のあり方からすれば、一対二、或は一対三の複数で結ばれても、それが真に安定したものであれば、それもまぢがないあり方だと思ふ。ただ、ここでいう複数結婚は、普通一般社会に行なわれている三角関係と混同され易いが、それとは本質的に異なるものであることを強調しておきたい」

「自己愛から発する独占欲、嫉妬心からお互いに解放されない限り、絶対に成り立つものではない。また、一方的にそうなれないのは相手の我執だとして(たとえそれが我執であつたとしても)、本人が納得しないままに押しつけ強行しようとしても、自らもまた我執をなくさない限り、決して成り立つものでない」(同前)

としてゐる。要するに山岸はこの世界を構成する原理と、己れ自身の苦い体験の反省とを総合化しつつ、以上のように結論づけているわけである。

三月半ばに確認の場があった後のニワは、真に一体夫婦として、あたかも魚が水に添うがごとくいた。今までのような人目には仲よくしていても、いつ反対の極に転化するかという不安がまったくなくなったのである。ニワの眼には、急に山岸が大きく見え始めた。日常生活の面でも、心和むようになった。これが初めての結婚であると、二人で新婚旅行に勝浦にゆこうの、吉野山へ桜をみにゆこうの、と色々楽しい計画を立てていたのである。

名古屋の家へも、山からはひんばんに人がきた。一日に何人も人が出入りしては、山岸に相談やら報告やらをしていくのである。そのように相変らずの忙しい中であっても、種々自分たち夫婦だけのプランを練っていたのは、そこに山岸の思想転換があったように思える。山岸はこれまで絶えず自分抜きに利他の世界にのみ生きんとしてきた。そこに一つの盲点（死角）があったのであり、彼は利己を望まないことで同時に、自己自身の盲信の問題も棚上げしてきたのである。

自利が偏りならば、自分を勘定に入れない利他一辺倒もまた、偏りには違いない。いや、それ以上に世界一の幸福者を目指している筈の自分が、自分自身を犠牲にしているのはおかしいことである。まず自分自身が幸福にならなければ、大衆を導くといっても、幸福というものの実体がわからないから、どこへ導いてよいか見当がつかんではないか。自分を勘定に入らずではなく、自利他利の二行、内外ともに「みなさん私のようになりなさい」といえるのが真の革命家である。

そう気がついた山岸はこれまでの「ポロと水」一辺倒を捨て（もともと物資豊満の山岸は、ポロ水一辺

倒でもなかったであろうが）、いつでも「ポロと水」でもやれるに変わって、ニワとの豊満生活を願ったのである。もとよりその面に関しては、万事もものと一流品好みのニワの生活の在り方が大いに関係あったと思われるのであるが……。

四月も大分経って、山岸は急に桜をみにゆこうといひだした。そして写真機を用意せいの、車を用意せいのといひ、犬山城へ葉桜を見に行ったのであるが、この時わざわざ自分からポーズをとって写させたのが、冒頭の桜を背景にしての二人並んだ写真である。この一事は山岸の心境を現わして余りあるもので、彼は有名な写真嫌いである。山岸が出席している時分の特講の写真をも、どれも顔をあらぬ方にそむけていてまともな写真がない。その写真嫌いの人が自分から、カメラを用意させて写真をとったところに、その時の心の自足と自信のほどが伺える。昭和三十六年四月、それは二人にとつての真の蜜月の期間だった。

おかしいのは映画を見に行った時で、ニワは予めいつもハンカチでなしにタオルを携えていったものである。どんな映画であれ、例えば何十年振りに親子が対面できたとか、今まで仲悪かった人同士が、ようやく仲を取戻すことができたなどといった場面になると、途端に山岸は辺り構わず「わあっ」と声をたてて泣きだすのである。周囲の客が呆れて振り返っても、泣きやまない。そんな時に隣に坐っているニワが、すぐさま用意してきたタオルをとり出し、さっと山岸にそれを手渡す。それを受けとった山岸は、すぐさま顔に当てがうものの、なお興奮は納らず泣きじゃくっていた。

そのような山岸がやがて四月二十八日に至って、鳥森の家で、「みててよ」と腕まくりして曲げてみせ、上膊の力こぶを叩きながら、「本当の男の底力を見せるのはこれからだよ」と張り切っていた。「あなた、惚れ直すよ」とも。

これはどういうことかというところ、三十六年に入って、いよいよ山岸ズム運動は質的転換の時機にさしかかっていたのである。しかもその質的転換とは二重の意味のことであって、一つは既成の春日の状況の改革の問題であり、他は新しく始まった実顕地造成に関する問題であった。

この二つの課題を背景にして山岸は、身内にひとりでの力の盛り上がるものを感じていたわけであるが、現実には春日の課題とは、経済的な問題もあったが、何としてでも解決を迫られていたのは、山の性生活の混乱であった。これにはほとんど山岸も頭を悩ましていた。性問題もこの頃になると、離婚、雑婚など目茶苦茶で、どうにも手のつけようもないほどにひどくなっていったのである。

三角関係、五角関係、スワッピングはおろか深夜、夫婦ものの寝所に入り込んで同衾してゆく奴がいる。学育の担当が、預かっているティーンエイジャーの子にまで手を出す。もつと悪いのは性の支配が同時に人の支配を生み、人の支配がまた性の支配を生むことであって、独裁君主並に権力を持ったYは、親戚・幼女・老婆の少数の女を除いて、山の凡ての女と関係したといわれるくらいにまでなっていた。中にはYに奴隷的に妻を提供し、その上サービスに足腰までもませられるというま

でいる。「こんな状態がもしマスコミによってあからさまにされたならば、今度こそ山岸会は一遍に潰されてしまうだろう」

これが山岸の心配の種であった。山岸の身近にいた人によれば、山の性問題が山岸の命を縮めたというくらいにある。そしてこれの解決のためにも食堂に貼り紙などして警告を促してはいたのであるが、じきにはがされてしまう。どうしてもより抜本的解決策が必要であるということで、二ワの提案において創設されたのが「研鑽学校」(四月)である。山岸はこの新しい無我執研鑽機関に、例に

よって過大な期待をかけていた。

春日で「研鑽学校」が創設されると同時に、「ヤマギシズム生活実践場、春日実験地」は「同世界実顕中央試験場」として生れ変わり、機構もそのように確立した。これは同年一月に兵庫県北条町に「同生活実顕地」第一号が誕生したことによるもので、この専門分業的二機構の確立によって、初めてミニ理想社会の拡大に出發したわけである。

実顕地についてはすでに述べてあるが、これまでの一体経営よりさらに進んで、全家族一つ財布となつて生活し、消費する生活体としてある。この生活体が、即理想社会の模型のように仕組まれてあつたのである。この実顕地であるが、現在は豊里実顕地のように、春日同様の集約的方法によって造成されているところもあるが、他の多くのように狙いは現状のままやるのが目標である。

山岸は先の六川実顕地の談話において「まあ山もあれまでできたが、あれは皆売り払ってできたもの。そのため『私などにはできないわ』となつて、あれは特別の人やとなる。これが普遍性がないという。それが農村で現状のまま、しかも普通の人で保守的堅実な人でできたとなると、周囲からどんなにいわれても、待っていた人が、探していた人が、これだ!! となつて飛びついてくる」と自信を持って述べている。

先の世界中をびっくりさせる秘匿技術というのも、実はこの実顕地の造成にかかわるものであるらしいのだが、この現状のまま近隣数戸が集まつた実顕地の最初にできたものが、兵庫の北条実顕地であった。

つづいてあちこちに、実顕地造成の気運が湧いてきた。そのうちの一つに岡山県の興除村があつたが、山岸はこの村を訪れて、これまで混乱を重ねてきた山岸運動の方針を伝えんとした。時恰もよ

し、四月二十八日には津で「山岸会事件」の判決が下りることとなり、山岸は当日には津へ行き、その足で岡山地方研鑽会を経て、途中京都にも寄り、春日改革の旅に出んとしたのである。

#### 4

このまきに岡山へ向けて旅立たんとしている山岸夫妻であるが、非常に充実した境地にあった。それはやはり仏道の教える内容のままの世界であり、要するに山岸夫妻はこれまでも実質的には同じ道を志してきたわけではあるが、さらに意識的に菩薩行を行わんとしていたことになるのである。

そもそも山岸ズムは、仏教、なかならず禅の思想を以って背景としていることは既に述べた通りである。しかしこの禅であるが、いくら心境を深めてみても、一体何のためにそのようなに深めるのかということがある。そこが大乗仏教の大乗仏教たる所謂であって、「上求菩提、下化衆生」、上に向かつては菩提を求め、下に向かつては衆生を教化するためにほかならない。修行の結果自己が極樂へ導かれたならば、そこに安住するのではなく、直ちに他を救うために極樂を出立せねばならない、とするのが禅の教えである。単に自分の心境が高まり、救われるのでは、小乗の教えに過ぎない。

もう一度釈迦に戻っていえば、釈迦は瞑想を重ねる裡に今自分が坐っていることも忘れた、没我の三昧境に入った。自己がまったくなくなった絶対無(空)の状態である。時間的にはもはや空は白みかけている暁の時刻であるが、その時チラッと眼に一点の光を感じた。と思った瞬間、その自覚的無意識の状況が破れて、自己が星に乗り移っていた。同時に星と自己とが不二にして一体であることが、直覚できた。この空即ち自他不二の神秘的体験の直覚が、悟りであり、智慧(般若)といわれる

ものである。

そしてこの法の自覚を得た釈迦が同時に「一切衆生悉くわが子」といわれたのは、自分と他人、自分と世界との間には切れ目がなくて、一体であるが故に、自分を愛することく、また他者をも愛せずにはおれないとなったのである。その他者を愛せずにはおれない衝動(菩提心)を慈悲といい、大乗仏教は智慧と慈悲の二者において完結する。ここに自利を後にして、利他を先行させる菩薩行の世界が開けるのであるが、ニワが知った絶対愛の世界とは即ち、この慈悲の世界と同じものであろう。

慈悲は、不二一体の正覚に裏づけられたもの故に真理である。西欧的な愛が憎しみに転化するがごとき愛ではなく、愛において一切であるが故に絶対となる。この普遍的な絶対愛を内容とする社会が、「絶対変らない一つ限りの」(『実態』) 眞実社会となるのである。(理想社会には「親愛の情が絶対条件」ともある)

ところで山岸ズムでは眞実絶対社会の革命家として、半メンバーと完全メンバーという格を設けているのであるが、完全メンバーとは「自分に一番きびしい事で、四六時中そのみに没頭できる人で、世界中の誰よりも貧乏になることを承知で、零迫覚悟して、誤解する人達からどんな疑いを受けようが、悪罵讒謔に怯まず……」の人で、「死を惧れているようでは、完全メンバーになれません」(同前)とある。半メンバーとは家族の都合や何かで、全面的にはなり切れない人を指す。

要するに社会主義の方面にいう職業革命家であるが、職業革命家も山岸のいうのはバクーニンの定義(「(1)革命家は運命の定められた人間である。彼は個人的利害、業務、感情、愛着、財産、自分自身の名前すら持たない」。「革命家の教理問答」)にも似て、一種ニヒリズムの様相を帯びるほど徹底している。こうした完全革命家が世に十人あれば、日本ぐらいひっくり返すのは簡単というのであるが、この「誰

からの、命令で動くものでもなく、自発的に自分が信ずるままに、自覚・納得の上で報酬を省みない事を無上の喜びと感じ」「不幸な人が一人も居ない社会」（同前）を目指す完全メンバーとは、畢竟大乘仏教にいう諸菩薩にほかなるまい。

私が実は特講を受けて、『実態』中一番感銘を受けた箇所が、実はこの「不幸な人が一人もない社会」の一行であって、私は直感的に山岸ズムは菩薩行であることを想って、ひどく感動したことを覚えていいる。その菩薩とはこの世に悩める衆生が一人でもいる間は自分は正覚はとらぬ、仏にならぬと心に決し、自利（自ら究極の目覚めを求めてゆく）、利他（人々をして目覚めしめてゆく）の二つの実践を無限に積み重ねてゆく人を用いのである。

絶えず人間の最高・最善を願い、最高・最善と知れば疑うことなく自ら最高・最善たらんとしていた山岸は、人格の最高・最善として菩薩を思い描き、自らまた菩薩たらんとしていたのである。しかも大事なことは自分一人ではなく、妻のニワにも菩薩となってもらうことで、文字通り一体夫婦を完成しようとした。

こうして山岸ズムの道とは即ち菩薩の本願にほかならないと考えれば、還元的に様々なことがわかってくる。例えば山岸ズムの隠された主要テーマとしての「衆議独裁」の意味も解けてくる。それはどういうことかという点、『十地経』の中には「菩薩とは隊商のリーダーである」とある。キャラバン隊は大勢の人や荷物を運搬してゆくわけであるが、菩薩はその隊列の先頭に立って歩くりーダーだということである。

しかも面白いことにその隊商の旅の計画は、それが完全であればもう実行されたことと同じことだとある。つまり完成は終りにあるのではなく最初にあるのであって、それ故隊商に参加する人々、これとに女、子供、無知な人々はただリーダーを信じてゆけばよい。何もいらぬ。自分は空手にして、ただリーダーを信じ切つてゆけばよいのである。そこに己れを絶対真実に委したものの、最も急進的で完全な喜びがあることになる。そこどころで一見奇異に聞こえる「衆議独裁」は、菩薩行と重なることになろう。

もう少ししいえれば山岸はまた「人間の生活は一生を通じて遊戯であり」「遊び踊って（私の日常は踊り）悔なき生き方で、この途でならニッコリ笑って死ぬそうです」（『養鶏法』）というが、菩薩の計画というものが、完全な計画であればこそ、無限の苦行も苦行ではないのであって、それは遊びにほかならない。初めに完全な計画があるから何の苦勞もいらぬ。菩薩が行うすべての行為というのは、『遊戯神通』の『遊戯（遊び）』だということである。

菩薩道は遊戯道にほかならないから、行為の結果は必ずしも自分に返ってこなくともよろしい。遊戯には執着の心がないから。そこに初めて回向という利他の觀念が成りたつ。いってみれば津を出た山岸とニワの二人は、この回向の菩薩行に旅立ったといえるのである。